

教員のカリキュラム・マネジメントへの意識を促す
スタートカリキュラムの実施
～資質・能力を活用・発揮する教育課程編成を通して～

古田 愉子（学校経営コース）

1 問題とその背景

(1) スタートカリキュラムの目的と課題

幼稚園・保育園・こども園から小学校へ入学する際に「段差」があり、連続的な資質・能力の発達を支えるには、小学校におけるスタートカリキュラムの工夫した実施が必要である。スタートカリキュラムの目的は、学習指導要領等において、現在まで、大きく3段階で変化してきている。初めてスタートカリキュラムが示された「小学校学習指導要領生活編」（平成20年）では、いわゆる「小1プロブレム」を背景に、その目的は「学校適応」にあった。

その後、国立教育政策研究所の資料（平成27年）において、その目的が「安全・安心な学校生活」と示された。さらに、「小学校学習指導要領第1章総則」（平成29年）において、「特に、小学校入学当初においてはスタートカリキュラムの作成と実施においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと」と示された。

しかし、スタートカリキュラムは未だ学校適応を目的としたものが多く、生活科を中心とした合科的・関連的な指導、弾力的な時間割の作成（カリキュラム・マネジメント）へと意識が向けられていない現状がある。

(2) 学校課題と研究の目的

勤務校であるB小学校では、スタートカリキュラムの実施において、大きく2つの課題がある。1つ目は、やはりスタートカリキュラムの目的が単なる学校適応に留まっていることである。2つ目は、各担任がカリキュラム・マネジメントを行っておらず、生活科を中心とした各教科を関連的・横断的につないだ日々の授業を実践するまでに至っていないことである。

そこで、本研究においては、この2つの課題を解決しうるスタートカリキュラムの作成とその実

実施体制を構築し、実践することで、上記の課題解決を図ることを目的とした。

2 勤務校における教育課程編成

B小学校では、育成する資質・能力を「応答力」とし、「身の回りに生じる様々な状況・問題に対して、自分とは無関係なものとして切り捨てるのではなく、自分を開き、自分自身にも関わる問題として引き受け、自らのもてる力を総動員して、異なる多様な他者と協働して力を合わせながら、最適な解決方法を探し出していく力」としている。

「応答力」を今次学習指導要領に示されている資質・能力の3つの柱に準拠し、学びに向かう力・人間性等を「思い・願い」「協働」「自律」、知識・技能を「多様性」「関係性」「地域性」、思考力・判断力・表現力等を「課題設定・情報収集」「整理・分析」「まとめ・表現」とし、9つを設定した。

全学年の単元配列表において、生活科と総合的な学習の時間を中核に据え、各教科等と生活科・総合的な学習の時間を、育成を目指す「応答力」を基に関連付け、示した。これにより、学校全体が資質・能力の育成へと向かう体制が整備された。

これによって、B小スタートカリキュラムは、学校全体として資質・能力の育成を目指す中で、学びの入り口として位置付けることができた。

3 B小スタートカリキュラムの実施体制

B小スタートカリキュラムの実施体制の構築に向け、以下の3つに取り組んだ。

(1) スタートカリキュラムの目的の共通理解

スタートカリキュラムの目的は学校適応だけではない。園で育成された資質・能力を小学校に入ってから、資質・能力で繋いでいくということがスタートカリキュラムでは大事である。このことを職員全体で共通理解する必要がある。

また、園では、自発的な遊びが生活の中心となり、その遊びの中に全ての学びがある。そこで小学校においても、遊びを中心とした活動を入学後から実施することとした。

この遊びを中心とした活動の中に各教科の学びの芽があり、それらを意図的につないでいくとい

う具体的なイメージを担当がもてるようにすることが大事である。

そこで、以下のようなイメージ図を作成した。

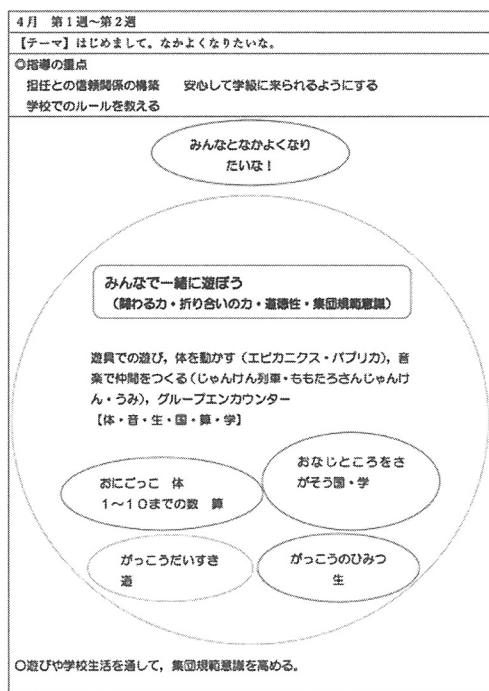


図1 遊びと各教科のイメージ図

また、「学校探検」等の実践においては、教師主導の「学校案内」ではなく、子どもたちから思いや願いを引き出し、そこから子どもたちが学びの主体者として、探求的な学びへと活動を展開することを通して、資質・能力の育成を目指すことを担任に伝えた。

(2) 実施期間の見直し

全国的に多くの小学校で行われている数週間のスタートカリキュラムは、学校適応という意味合いが強い。資質・能力の育成へと向かう教師と子どもによる創造的な実践となるには時間的に短すぎる。そこで、校長の指導のもと、B小スタートカリキュラムの実施期間を夏休み前までとした。

(3) 担任のカリキュラム・マネジメントへの意識を促す手立て

担任が自分自身で目の前の子どもたちの思いや願いを引き出しながら、カリキュラム・マネジメントを行い、生活科を中心としたスタートカリキュラムを行っていただけるよう、以下の4つの手立てを考えた。

- ① カリキュラム・マネジメント機能をもたせた学年会の実施

1年生の担任が生活科を中心としながら、各教科と関連的・横断的に繋いだ実践をしていく上で、実践上の課題の相談をしたり、活動の進捗状況を確認したりするなど、今後の活動の展開について見通しをもてるような機能を学年会にもたせた。学年会を通し、お互いの実践について共通理解したり、各学級への活動へのアイデアなどを話し合ったりした。これにより、担任がカリキュラム・マネジメントへと意識を向け、各学級による独自の生活科の活動を実践することができた。

② 日案から週案への段階的な移行

1年生の担任が、生活科を中心としながらも、他教科との関連を図った活動の具体をイメージできるように、1週間分の日案を作成した。しかし、日案を長期間分例示した場合、担任は、例示された活動を行うことのみで終始してしまう。そこで、日案は1週間分作成し、担任が1年生のスタートカリキュラムで何を行うのかを具体的に示し、その後は週案により、主な活動を例示するのみとした。これにより、担任が段階的にカリキュラム・マネジメントを行うことができるようにした。

③ GWまでは時間割なし

担任がこれまでの教科の枠や学校の授業の1単位時間が45分であることを意識せず、弾力的な時間割の運用へと向かうことができるようにするため、GWまでは時間割はなしとし、子どもの思いや願いを生かし、子どもが存分に活動を楽しめるようにした。この期間は、国語、算数といった教科の名前は出さず、「ともだちとなかよくなりたいな」といった活動名のみを週案等に示し、GW明けから徐々に子どもの実態に合わせ、段階的に各教科へと分化できるようにした。

④ 1時間目の始業は朝9時

通常、B小学校では、8時に開門し、8時20分から朝活動が始まることとなっている。しかし、手洗い、トイレ、身支度などをわずか20分で行うことは、新しい学校生活を始める子どもたちにとって大きなストレスとなる。

1時間目の始まりを9時とすることで、緩やかな学校適応を目指した。

⑤ 人材資源の活用

人材資源の活用として、級外職員による朝の時間の手伝い、保護者による給食ボランティアの導入、栄養教諭や養護教諭と連携した授業、司書教諭と連携した学級文庫の整備を考えた。

朝の時間の手伝いでは、級外職員がコロナ禍において始まった毎日の健康観察表のチェック、連絡帳の確認、教室に来ていない子への対応等にあ

たことで、担任は身支度等を行う子への支援にあたり、早い時期に子どもが担任との信頼関係を築けることをねらいとした。

給食ボランティアは保護者から募り、全ての子どもが給食当番を経験し終える4週間を実施期間とした。

司書教諭と連携した学級文庫の整備においては、子どもたちが園で慣れ親しんできた本を配置することで、安心して学校でも過ごせるよう環境整備の1つとして行った。

4 B小スタートカリキュラムの実際

筆者は大学院2年次、1学年4学級の学年主任を拝命した。以下に、1学年主任として、4月に実践した生活科を中心としたスタートカリキュラムの一例を挙げる。

C教諭の学級では、学校探検で、掃除ロッカーにあるひらがな1文字（管理用の記号シール）を発見し、そこから学校中のロッカーのひらがなを調べ、国語のひらがなの学習と関連を図りながら進めていった。D教諭の学級では、なぜ屋上出入口が閉まっているのか、その理由を予想し、雨の日だからだと結論づけた。しかし、良い天気でも閉まっていることから、その疑問を追求することとなった。E教諭の学級では、学校にある知りたいことを「はてな」として、知りたいことを探す活動を展開していった。筆者の学級では、「いってはいけません」と書いてある場所（屋上）を発見し、どうしたら行けるのかを考えた。すると、子どもたちは、校長先生にお願いすることを思いつき、校長室を探すこととなった。ここから、子どもたちが学びの主体者となる、探求的な「学校探検」が始まった。さらに、この活動は、校長先生に屋上へ行かせてもらえるようお願いする活動へと展開し、国語科と関連的につなぎ、学習を進めた。

このように、目の前の子どもたちの思いや願いを引き出し、本当に子どもたちがやってみたいことを中心に各学級で実践を展開することができた。

また、活動する際、どのようなことに気をつけて探検すれば良いと思うかを子どもに問うた。子どもたちは、これまでの経験や学びから、お兄さん、お姉さんが学習中であることから、静かに歩かなくてはならないことなど、学校におけるルール等を自分たちで考え、守ろうとする様子が見られた。

このような各学級における生活科の実践を支えたものの1つに週1回の学年会がある。

子どもたちの思いや願いから、どのように展開していくことができそうか、どの教科とどのように関連が図ることができそうかを相談しあった。

これ以後、同様に各学級で生活科を中心としたスタートカリキュラムを夏休み前まで進めていき、子どもの思いや願いを中心とした活動を展開することができた。

5 スタートカリキュラムにおける担任の意識変化

GW前、担任に4月からのスタートカリキュラムの成果と課題について、振り返ってもらった。その結果、担任が、次の2点を成果と考えていることが分かった。

1つ目は、子どもから経験や思い、願いを引き出すことの「よさ」である。この「よさ」について、次の2つの意見があった。1つは、「この先生は自分たちのことを聞いてくれる」ということが子どもの安心感や信頼感を生むという意見である。もう一つは、やりたい活動の中で学校のルールを教えた方がうまくいくという意見である。

2つ目は、発問の変化である。「どうして?」「どうしたらいいと思う?」など、自分自身のこれまでの発問が子どもの思いや願いを引き出そうと変化したとE教諭はレポートで記述していた。

担任は、生活科を中核とし、各教科を関連的につなぐことへと意識を向け、実践をすることがなぜできたのだろうか。そして、上記に述べたようなスタートカリキュラムのよさを実感することがなぜできたのだろうか。その背景について考えてみたい。

6 背景要因

担任のレポートやインタビューから、担任の意識がカリキュラム・マネジメントへと向かった背景には、大きな2つの段階があると考えられる。

最初の段階では、子どもたちへの「段差」を緩やかにするための人材資源を活かした環境整備や時間を活かした制度変更などが、担任の精神的・時間的なゆとりへとつながり、担任が「よさ」を実感した段階である。

次の段階は、担任が、スタートカリキュラムに不安を抱えながらも、思いや願いを引き出し、生活科を実践することにより、その「よさ」を子どもの姿から実感するのである。これらがスパイラルに積み上がることにより、担任の意識がカリキュラム・マネジメントへと向かっていったと考え

られる。実施体制と教員の意識等をイメージすると以下ようになる。

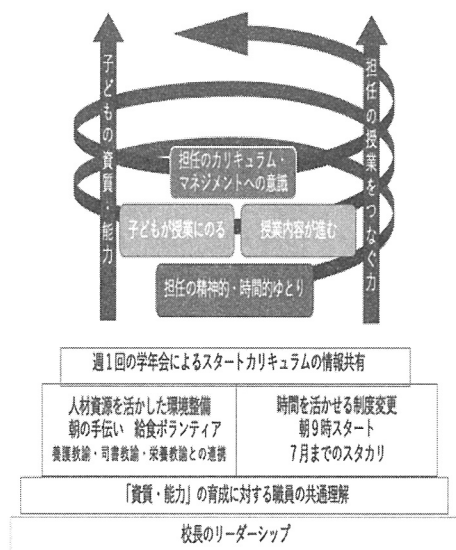


図2 B小スタートカリキュラム
実施体制と教職員の意識のイメージ図

まず、校内実施体制の大きな基盤として、教職員を資質・能力の育成へと向かわせる校長のリーダーシップがあり、研究主任を中心に「資質・能力」と各教科とのつながりを明示した年間指導計画の作成や教職員の共通理解を図る研修などがある。さらに、人材資源を活かした環境整備、時間を活かせる制度変更の実施がある。上記のような実施体制の上に、生活科における実践の情報交換や相談、助言などを目的とした学年会があるのである。

このような学校全体の実施体制を通し、担任は生活科を核とし、各教科と関連的・横断的に繋ぐことに意識を向けることができた。実践における子どもの姿を通し、担任は主体的に子どもが学ぶことの「よさ」を実感し、さらに、カリキュラム・マネジメントの力を高めていくことができる。

7 アンケート調査から

スタートカリキュラムにおける小学校の教員の意識において、次のような点が課題であるとする見解がある。

「小学校側の課題として、幼児期に育まれた資質・能力を認識せず、1年生が0からのスタートになっている傾向や型にはまった傾向が指摘されている。」(『中央教育審議会初等中等教育分科会における「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」

に関する委員からの主なご発言と事務局回答（概要）(令和3年7月20日)』)。

小学校教員が、園での経験や学びを引き出そうとしていない傾向を指摘しているのである。

これを踏まえ、11月にA市小学校教育研究会生活部1年生担任25名にスタートカリキュラムの成果や効果に関するアンケートを行った。今年度、スタートカリキュラムを行った20名から回答を得た。

その結果、「1年生であってもすでに経験や学びがあり、それを生かせると思えるようになった」と回答した教員は65%、「生活科と他教科とを繋いだ実践を行うようになった」と回答した教員は55%であった。

A市では、今年度よりスタートカリキュラムが完全実施となったが、カリキュラム・マネジメントへの意識や、子どもはすでに学びや経験があるものとして捉える子ども観へと教員の意識を変えていくことの困難さが窺える。

8 まとめ

スタートカリキュラムの目的である資質・能力の育成は、全ての教員がこれから目指すところであり、子どもを学びの主体者とする上で、子どもの思いや願いを引き出すことは極めて重要である。また、そのために、担任が各教科を関連的・横断的につなぐことへと意識を向けることは、実践上で欠かせない。

本実践では、資質・能力の育成を学校全体で目指し、スタートカリキュラムをその入り口と位置付け、内外の人材を活かした学校体制と時間を活かした制度変更を実行したことにより、担任の意識をカリキュラム・マネジメントへと向けることができた。しかし、1年間の実践で十分なカリキュラム・マネジメントの力をつけることは難しい。

学校全体で資質・能力の育成を目指す体制を構築し、生活科・総合的な学習の時間と各教科とを関連的・横断的につなぐ実践について、すべての担任がイメージできるよう、各学年での学年会の機能を高めること、さらに、担任自身が「よさ」を実感できるよう、各学年のミドルリーダーである学年主任が学年での実践の「よさ」を価値付け、学校全体で継続して取り組んでいくことが、子どもの資質・能力の育成において重要だと考える。